とがらしのしらべ

奈良工業高等専門学校
現代視覚文化研究会

2019年 冬会誌

まえがき

こんにちは。現代視覚文化研究会の冬会誌『しらはえのつき』をお読みいただき、ありがとうございます。はじめまして、会長の「しゅう」と申します。

高専祭も無事に終わり、テストも過ぎ、2019年がやってきました。前回の秋会誌では、ページの締め括りであるあとがきを担当していましたが、編集から会長に栄転（？）したため、今回はまえがきでの登場です。うぇーい。

とはいいつつ今回、編集のお手伝いはさせていただいております。正式に役職が引き継がれるのは次回の春会誌からです。新しい編集さんの労働……いや、活躍を楽しみにしていてください。

さて、ここでは表紙のデザインについて話させていただこうかと思います。

今回の表紙のイラストは、例のごとくシルフィイさんに描いてもらいました。ありがとうございます。そして、表紙含めた装丁デザインは私が担当しています。

まずこのイラストを見て目に入ったものは、手に持ったハートマークです。これはチョコレートなんでしょうかね。バレンタインデーはとっくに終わってしまいましたが、ここから着想を得て、ピンクと白を基調のデザインにしようと思いました。

使用したソフトはAviUtlっていうヤツ。映像製作のソフトです。たまにいらっしゃいますが、このソフトで画像編集をする人間はとても頭が悪いと思います。表紙をデザインしてみた感想ですが、普段は1280×720（HD）の環境で作業しているので、B5サイズの編集ウィンドウは新鮮に感じました。ええ。

スペースを使って自分のことをつらつらと書かせていただきましたが、尺稼ぎなので悪しからず。

この会誌で、今年度の現視研の大きな活動は最後です。次に皆様とお会いするのは、おそらく4月に公開される春会誌『Alchemy』となります。一年の締め括り、来年度の新一年生に会誌を手渡しできる日を心待ちにしながら丹精込めて創作した有象無象の作品たちを、ぜひ、お楽しみください。それでは。

しゅう

目次

TEXTER 悪夢の内外 3

アシッド 晴天 6

えのぐふで 理不尽の生 8

タニイム 或る物書きの苦悩 11

編集 タニイム

表紙 シルフィイ

悪夢の内外

TEXTER

私はいつも死んだように眠っていて、毎朝起きるたびにここが「現実」であることを確認する。

頬をつねったり、セルフデコピンしてみたり、その他いろいろの手段を検索し実行してみたけれど、いずれにせよ毎朝訪れる私の寝室は「現実」のようだ。ただし、これらの方法の効用に疑念を抱いてはいけない。

そして何らかの方法でそこが「現実」であると確認できたとき、私はようやく一息つくことができる。

私は「現実」が好きだ。空想の世界のほうが好き、という人もいるが、私は「現実」に起こっていることの方がずっと好きだ。

「現実」は空想の世界と違って、いろいろなルールに縛られている。最もわかりやすい一例を挙げれば、私たちを地面に押しつけようとする重力。物理法則もルールのうちの一つだけれど、ほかにもマナーだとか、法律だとか、数え切れないほどの制約が身の回りを取り囲んでいる。常識として存在していたなら、カウントすることすらできないかもしれない。だが、この制約が逆に私を安心させるのだ。

ルールは私を縛るもの。でも守っている限り、ルールも私を守ってくれる。だから私はルールを守り続ける。

ベッドから出ると、少し冷たい空気が肌に当たる。

これは少し厚着した方がいいかもしれない。油断して外出すれば、歯をカチカチと鳴らしている未来が容易に想像できる。

パジャマを脱いで、クローゼットから適当な服装を選出して、それに着替える。どの服もピカピカで、そういうデザインでない限りはしわ一つない。まだ着たことがない服もいくつかあるので、そのうち室内でちょっとした一人ファッションショーをしてもいいかもしれない。

あまり雑誌を読まないため、流行には詳しくないのだが、これだけ無難な服装ならば変な目で見られることもないだろう。そんなド定番な服装に身を包んだ私は、壁に掛かったカレンダーをチラリと見て、今日が日曜日であることを確認した。

誰もいないテーブルで、トースターにパンを投げ入れて、スイッチを入れる。インスタントコーヒーの粉を用意して、砂糖も入れて、ポットのお湯でコーヒーを作る。冷蔵庫からヨーグルトとプチトマトを取り出して、置いてあったパン用の皿にのせる。とても簡単な朝食だが、あまり凝った料理を作ったところで見せる相手はいない。そこそこおいしくて腹が満たされれば、それでいいのだ。

実際のところ、おしゃれな朝食にも憧れはあるのだが、自分で作ると作ってすぐに食べてしまうのがなんだかもったいないような気がして、気が引けてしまうのだ。簡単な朝食は、気軽ともいえる。

そんな朝食を食べ、食器をさっと洗い、忘れずに歯磨きをしたら、次はどうしようか考える。家でゆっくりするのも手だ、確か録画しておいたテレビ番組がいくつかあるし、動画サイトの方でも後で見るリストがたまってきている。だが今の気分は外出だ、どこか外で遊びたい。具体的にはどこへ行こうか、服についてはむしろ余っているので、買うとすればちょっとした小物だろうか。それなら百均か雑貨屋か……まあ、どれにするにせよ、ショッピングモールに入ればすべて見ることになるだろうが。

なんてことを適当に考える。ちょっとした予定を立てるこの瞬間が、たまらなく好きだ。特に買い物の予定は立てたところでほとんどその通りにしないけど、それでも何を見て回ろうか考えるのは、実際に歩いて回るのと同じくらい好きだ。

予想通り、私は近所のショッピングモールへ行くことに決めた。あそこにはいつも新しいものがある。いつも行っている場所のはずなのに、毎回まるで初めて来たかのような気分になるのだ。今の心は晴れやかだが、何か悪いことがあって落ち込んでいるときでも、

あそこへ行けばリフレッシュできる。

ショッピングモールまでは近いが、確か徒歩だと十分程度かかったはず。財布や携帯電話を小さくておしゃれな鞄にしまい、家を飛び出すと、秋の柔らかな日差しが心地よい。時折吹いてくる風が、秋であることを強く思い出させてくれる。こたつを引っ張り出せばよく眠れそうだ。起きられなくなりそうだが。

閑静な住宅街を抜け、自動車が行き交う横断歩道を渡り、パン屋のいい匂いを胸いっぱいに吸い込む。ああ、なんと香ばしい、いい匂いだろうか！　しかしパンを焼くには少々早すぎやしないだろうか。いや、ショッピングモールはもう開店しているのだから、パン屋もこのくらいでいいのだろう。思い直す。

パン屋の前を通り過ぎたら、今度は錆びかけの歩道橋を渡る。今日みたいに快晴の日には、ここは最高にすがすがしい場所だ。北風さえここでは不快なものではなく、季節を彩るフレーバーに過ぎない。最近の夏は異様に暑いので、さすがにあの酷暑の中ここに来たいとは思わないが、それ以外の季節ならいつでも来たくなる、素晴らしい場所だ。

さて、いよいよショッピングモールだ。たくさんのお店が集合しているこの施設は、面積も高さもかなり大きい。おそらくここ一帯で最大だろう。中にいるとあまりその広さは感じないのだが、ショッピングモールは天井が高いみたいな常識があって、それに影響されているのかもしれない。

建物に遮られてか、先ほどまで肌に感じていた風は全く感じない。せいぜい歩いた速度が風となって当たる程度である。日差しの中で歩いたので、ちょっと暖かくなったかもしれない。もうちょっと脱ぎ着しやすい服装で来ればよかったかな、と少々後悔するも、今日のところはどうしようもないのでそのまま入店する。

そんな私のことを知ってか知らずか、店内の暖房は控えめだった。外よりは暖かいな、というのが肌で分かるが、冬場みたいな大げさな暖房は入っていない。日差しがないことを考えると、このままの服装でちょうどいいだろう。さすが考えられている。

店内は音楽が流れているだけで、ほかはかなり静かだった。カートの小さな車輪が転がる、カラカラという音すらも聞こえない。休日ということを考えれば深刻な客入りに見えるが、やはりほとんどの人々は昼まで寝ているのだろうか。早く来すぎたというのは、案外間違ってなかったのかもしれない。

いつもは混んでいる店内しか見ないので、空いているのは新鮮だ。誰も見ていないなら、売り場と売り場の間の少し広いところでくるくると踊ったりしてみたい。残念ながら店員さんはいるので、そんなことはできないけど。

一階のお店から見て回る。まだ開いていないパスタのお店、かわいいキーホルダーやミニチュアのお店、おしゃれな輸入雑貨のお店、どこを見ても見たことのないキラキラしたものが並んでいる。もし財布の中身が無限ならば、一人では到底持ちきれないほどのアクセサリーを買ってしまいそうだ。所持金が有限でよかった。

特に必要なものはないので何も買わずに眺めているだけだが、見ているだけで楽しい。宝探しをしているみたいだと例えることもできるが、周囲すべてが宝のようなものなので、その点が微妙に違う。

あっちへふらり、こっちへふらり、クラゲが泳ぐようにいろいろな商品を見て回る。やはりここに来て正解だった。目に入るものすべてが私を楽しませてくれる。統一感のある案内表示が、適度な安心感も与えてくれる。

しばらくして昼にさしかかると、そろそろ少し疲れを感じてきたので、帰宅することにした。おなかも空いたかもしれない。

結局何も買わなかった。だが心は満たされていた。

未だにいい匂いのするパン屋の前を通って、錆びかけの歩道橋をゆっくりと渡る。ちょっと高くなったお日様を確認して、住宅街まで帰ってくる。やはり帰り道もまさに秋晴れといった感じで、ちょっとした紅葉を見つけては、スマホで写真を撮って持ち帰る。もっと友達が多くて、休日も友達と出かけるような人なら自撮りもする

かもしれないが、あいにく私には見せたい相手がいないので、景色だけの写真で問題ない。

家に着く。玄関を開け、ただいまと言う。その声に反応する人はいない。玄関で靴を脱ぐと、適当な部屋着に着替え、リビングの床に寝転がった。外よりひんやりとした床の温度が背中に伝わる。

もうすぐお昼の時間だ。部屋の掛け時計の長針は11の刻印の上を過ぎ、いよいよ正午という時刻を示そうとしている。

今日のお昼ご飯は何にしようか。確か、少し前にレトルトのハヤシライスを購入していたはずだ。ああ、しかし先ほどのパンの匂いが鮮やかによみがえる……パンでもいいな。

そこで私は、ふと重大な違和感に気づいた。

行きがけには歩道橋の前にパン屋があったはずなのに、帰りがけにはショッピングモールから見える位置にあった。道中にパン屋は二つもないはずなので、帰り道ですぐにパン屋の前を通り過ぎたということは、パン屋が何の前触れもなく移動していることになる。自分で言っていて意味が分からないが、自分の記憶をたどるとより深い混乱に陥る。どうやって移動したのだろう。私の錯覚ならいいのだが、しかし。

考えれば考えるほど、謎が深まるみたいだ。まるで視界が霧に覆われたような気分になる。

ああ、頭ももやもやしてきた。意識が遠ざかっていく……

目を覚ます。周囲に広がる惨状が、昨日までの私の記憶を呼び起こす。

いつも私は死んだように眠っていて、毎朝起きるたびにここが現実であることを確認する。

頬をつねったり、セルフデコピンしてみたり、その他いろいろの手段を検索し実行してみたけれど、いずれにせよ毎朝訪れる私の寝室は現実のようだ。そもそも、こんな方法で夢か現実か判別することができるのだろうか。

そして何らかの方法でそこが現実であると確認できたとき、私は絶望するのだ。

ベッドから出ると、少し冷たい空気が肌に当たる。

せいぜい風邪をひかないようにしなければ。風邪薬に頼ることはできないので、治すのが面倒だ。

あちこちが破け、焦げ跡もあるノートを手に取り、その上に落書きだらけの教科書を重ねる。それを雑に穴だらけの鞄に放り込んで、留め具を付ける。

ああ、忘れるところだった。朝食も食べなければ。

了

晴天

アシッド

――世界はとっくに変わってしまったらしい。らしい、というのも、それはその変化したのが何時からなのか、どうやって変化したのかを伝えることができる物が全く残っていないからだ。まぁ正直、そんな昔の事なんてどうでもいい。大事なのは、今日も生き残ること――つまりは、数メートル離れた場所からこちらを見つめるいかにも腹が減ってそうなデカい生き物からどうやって逃げるか、ということだけだ。

とにかくまずは、走って逃げよう。振り切れる気はしないが、距離を詰められるのはまずい。そう思い、すぐさま反転して全力で走る。それと同時に、背後から大きな地響きが追いかけてくる。しかも、思ったより速く、どんどん近付いてくる。これは、無理か。諦めかけたその時、真後ろで一際大きな地響きが鳴り、追いかけてきていた生物が地割れに呑まれ、そのまま、遥か下に広がる海へと落ちていく。ギリギリ地割れに呑まれなかった自分は助かったのだと実感すると同時に、その場にへたり込んでしまう。

今回のように窮地に陥って、奇跡的に助かったのはこれで二回目だ。自分はよっぽど運がいいらしい。だが、世界が変わる前――つまり、大地が全てバラバラになって浮き上がり、その遥か下に一切陸が見えない広大な海が広がる世界になる前だったなら、もっと簡単に死んでいたのだろう。

どうやって地面が浮いているのかなんて誰も考えたりしない。人が考えるのは今日をどうやって生きるかという事だけだ。人は皆、こんな危険な場所ではなく、もっと安全な場所で生活している。といっても、もし前に奇跡的に逃げられたあの灰色の生き物の群れに、いま襲われたら為す術なく壊滅するだろうし、していないのは単に運がいいだけだろう。事実、自分がいた集落はそうして滅んだのだし。

全力で逃げた際の息切れが収まってきて、大地に空いた穴から遥か下に広がる、何処までも続く黒い色をした海を見る。そして、空を――海と同じように何処までも続く分厚い雲を見上げる。そう――変わったのは海や大地だけではなく、空も変わったらしい。常に雲に覆われた曇天で、時折雨を降らすだけの空。なんでも、世界が変わる前は、昼間にはとても明るい太陽が浮かび、夜にはぼんやりと光る月が輝いていたのだとか。

今を生きる人達は皆そんなものは知っているが気にしないだろう。昔から伝えられているのは生きる為の知識だけだ。だがそれでも、雲の上の話は伝えられ、その話をする時、誰一人として例外なく憧れを浮かべていたのだ。それほどの物なら――見てみたい、と思うのは誰でもそうだろう。そして自分はもうたった一人なのだ。死ぬ前の最後の挑戦としては最適だろう。

そう思ったから山を登り、あと三分の一くらいまで来たのだが…正直、次何かにでくわしたら流石に無理だろう。もう食料もほとんど残っていないし、さっさと行くことにしよう。そうして目の前の大穴を避け、さっき全力疾走した跡を急ぎ足で歩いていく。

やがて夜になってしばらくした頃、あと少しで雲に到達するという所まで来た。が、そこでやらかしてしまった。あの灰色の生物の群れに見つかってしまった。奴らは速いし、連携して逃げ道を塞いでくる。とにかく走るしかない。そうして雲に向けて突っ込んでいっているのだが、もうすぐそこまで来ている。流石にもう駄目だ――と、そう思ったのだが、何故か灰色の生物達がいきなり追いかけてこなくなった。疑問に思い、警戒しながら振り向くと、ちょうど、灰色の生物達が立ち止まっている辺りから一切の草木が生えておらず、自分が今いる場所は完全な岩場になっていた。困惑したが、どうやら奴らはあそこよりこちらには来ないようだ。雲はもうすぐそこだし、ほっといてさっさと行こう。奴らが本当にこちらに来ない保証はないのだし。

そうしてあの灰色の生物達を放置して更に先に進み、ついに雲の目の前まで来た。あれほど遠くに見えていた分厚い雲が今目の前にある。雲に手を触れ――そのまま、雲を掻き分けて進んでいく。

足元に気を付けつつ、雲の中を進んでいく。どれくらい進めばいいのだろうか。雲の上に到達出来るのかと不安になりつつ足を止めずにいると、不意に咳き込んでしまう。そこで初めて、自分の体の感覚が少し変になってきている事に気付く。雨を浴びても全くそんな事は無かったのだが、どうやら雲は人が吸い込むのは良くないらしい。だが、今更逆戻りする事など出来ない。焦りながらも、これ以上雲を吸い込まないようにしながら雲の向こうへ進んでいく。

そして、どれくらい進んだのかは分からないが、分厚い雲を抜け、ついに雲の上まで来た。

――空を見上げる。青い色をした、暗い色をした海やどんよりした雲と同じように、何処までも続く空を。

傍に手頃な感じの岩があったので、そこにもたれて座る。全身に激痛が走っているのに、体の端の方は感覚がほとんどない。もはや死ぬのも時間の問題だろう。

だが、自分は最後の最後まで運が良かったようだ。ちょうど正面、遥か向こうから昇ってくるとても眩しい物が見える。あれが、世界が変わる前は大地を照らしていたという「太陽」で間違いないだろう。

眩しさに目を細めながら、太陽の輝きを、それに照らされて更に青くなる空を、下と上で全く違う姿を見せる雲を、ただ座って眺める。

この光景を、なんと言えばいいのだろうか。これほどの輝きを昔から伝えるのなら、一緒にこの光景を表す言葉も伝えればいいものを。

ああ――そろそろ限界か。激痛が走っていたはずの体も、既にほとんど感覚がない。視界も暗くなってきた。だが、それでも――この光り輝く光景を見ながら最後を迎えられるなら、それで充分だ。

それだけで、自分は何よりも幸福だ。

了

理不尽の生

えのぐふで

「熊坂さんは何者かに殺されました。そして犯人は、この中にいます」

古びた館の一室で、江渡河（えどがわ）　蘭羽（らんば）は最近テレビで見た格好良いポーズをとりながら言い放った。

部屋の中には蘭羽を入れて四名。館の主、烏山（からすやま）　彰（あきら）。その妻の烏山　藤子（ふじこ）。そして浮浪者の筒井（つつい）　泰武（やすたけ）。あとは――もう一体。

烏山家の使用人、小田（おだ）　清一郎（せいいちろう）が４人の中心で無残に転がっていた。

事の発端は一五分前。小田以外の四人がリビングでお茶を嗜んでいると、突然上の階から大きな叫び声が上がった。これはもちろん小田のものだ。

あわてて四人が駆けつけると、叫び声の出所と思われる部屋には鍵が掛かっており、彰と筒井が扉の破壊を試みた。筒井は年齢的にも若く、学生時代にはスポーツをやっていたため体はしっかりとしている。彰は年は食っているものの、ジム通いのおかげでなかなかに立派な体格をしていた。

しばらくの時間を用し、扉は開かれた。すると、部屋の中央で倒れ込んだ小田の姿が発見された。驚く三人をよそに、江渡河がさっと小田のもとにかけより、脈を確認した。

「駄目です。死んでいます」

「し、死んでる……？」

「なんで、なんで小田さんが……」

突然の出来事に混乱した様子を見せる三人。しかしそれも、江渡河は遮った。

「皆さん、慌てる気持ちは分かります。しかし今は犯人を探さなければいけません。だって――」

どこかわざとらしいカメラ目線を決めつつ、江渡河は言い放った。

「だって、この物語はフィクションなのですから」

実際の人物・団体とは一切関係がありません。

※

「さて、まずは犯行時刻の確認です。小田さんは先ほど叫び声を上げているのですから、殺されたのはついさっきと見ていいでしょう。我々が叫び声を聞いてからドアを開けるまでの間に、小田さんは殺されたということです。次にその時間帯の皆さんのアリバイですが、まあこれは説明するまでもないでしょう」

小田が叫び声を上げたとき、それ以外の四人は全員一回のロビーでお茶を飲んでいた。このお茶会は事件発生の三〇分程前に始まっており、今現在までにおいて、途中で席を外した者は存在していない。

「それと、事件現場の確認です。ドアにはもちろん鍵がかかっていましたし、窓は鍵が掛かっているようです。烏山さん、他にこの部屋に入る手段はありますか？」

「いや、ないな……」

「ええ。大分住んでるけれど、リフォームも一度もしていないし、新しくできた通路なんかもないはずよ」

「なるほど、つまりこれは完全なる密室というわけです。この閉じ込められた空間で小田さんは殺されたのです」

「おいおい、ちょっと待ってよ」

今まで口を閉じていた筒井が、おもむろに口を開けた。

「小田さんは完全な密室で殺されて、俺たちの中にその犯人がこの中にいる。でも俺たちのアリバイは全員が完璧だって？　それじゃあ筋が通んねえだろ」

この館は招待者のみが宿泊するシステムとなっているのだが、筒井だけは例外である。館の周りで飢え死にしかけている所を烏山夫

妻に助けられ、それからしばらく居候をしている。死にかけの自分に飯を作ってくれた小田にはとても感謝していたし、だからこの事件の犯人を暴くことに、いっそう気を入れている節がある。
「あんたが探偵だかなんだか知らねえけどさ、適当なこと言うのはよしてくれや。あんたにとってはただの他人かもしれねえが、小田さんは俺にとって大切な人なんだよ」
「ほう」
「俺は不器用だけどよ。小田さんに料理も教わった。いつか作ってやりたかったのに、どうしてこんなことに……」
「いやいや、お気持ちお察ししますよ筒井さん。熱くなるのもごもっともです。けれどもね、私も適当にモノをいっている訳じゃあないんですよ」
　どこか冗談めかしたような江渡河の顔が、きりっと引き締まっていく。
「この部屋は密室だし、我々のアリバイは完璧。しかし犯人はこの中にいる。それは確実なのです」
「……けどそんなの、どうやって殺すって言うんだよ?」
　江渡河の話に真面目に耳を傾けるようにはなったものの、まだ十分に信頼は仕切れていない様子の筒井である。
「いやいや筒井さん、人を殺すのはなにも直接殴ったりするのが方法じゃあないじゃないですか。そう、例えば部屋に仕掛けを施すとか」
　江渡河以外の三人が周りを疑るように見つめ始めた。
「例えば部屋の床を踏むと家具が倒れてくるとか、そういうう罠を仕掛けたとするならば、犯行の九割は私たちがお茶会をする前に終わるのです。罠にさえ掛かってくれれば、小田さんは勝手に死んでくれる」
江渡河部屋の奥に置いてある小さな椅子に腰掛け、服のポケットから小さなメモ帳を取り出した。
「こう仮定すれば、私たちのアリバイは全て崩れます。さあ、皆さんの今日一日の行動を全て教えてください。まずは筒井さん」
「……俺は朝飯を食ってから、しばらく外に出てた。館の周りをぶらぶら歩いて、帰ったら丁度昼飯だったから食って、そのあとは茶会までずっと部屋にいたよ。彰さんに呼ばれて降りてきたんだ」
「なるほど、烏山ご夫妻は?」
「……私は、朝は客人とチェスを指していたよ。古い友人が来ていてね。昼食を一緒に食べてから帰っていったんだ」
「筒井さんはその客人の方を見ましたか?」
「ああ、昼飯の時には見たぜ」
　筒井は力強くうなずきを返した。
「なるほど、じゃあそれは確実なわけだ。その後はどうされましたか?」
「友人が帰ってからは、ずっとリビングにいたよ。新聞を読んでたんだ。妻はその時キッチンにいて、クッキーを作っていた。」
「ほう、奥様は彰さんがリビングにいることは見ていましたか。」
「ええ、見ていたわ。一、二度トイレに行ったけれど、一分もしないうちに戻ってきてるわ」
「なるほど、午後にはお二人にアリバイがあるということですね。午前中は何を?」
「ベランダに出て、読書をしていたわ。今日は天気が良かったものだから」
「ほう、ベランダ。外で散歩をしている筒井さんのことは見かけましたか?」
「……一度だけ、筒井さんが歩いているのを見たわ。でもそれ以降は見てないわね」
「ふむ、ありがとうございます。ちなみに僕はずっと部屋にいました。疑ってくれても一向にかまいませんよ」
　あっけらかんとした態度で江渡河は自分の怪しさを周囲に晒した。
「さて、今日のアリバイは午後の烏山夫妻だけ。一応筒井さんは目

撃証言があるとはいえ、ほとんど当てにはなりません。つまり仕掛けの類いで小田さんが殺されたとする場合、私たちの誰にでも小田さんを殺すことは可能だったのです。さあ、そこで重要になるのはそのトリックです。これを解き明かすことができれば、それが可能であった人物を浮かび上がらせることで犯人を絞ることが可能になります――――と、言いたいところなのですが」

江渡河は急に押し黙り、場に幾ばくかの沈黙が流れた。

「……？　おい、どうしたんだよ探偵野郎。さっさとそのトリックとやらを推理して、犯人を俺たちに教えてくれよ」

筒井の言葉を受けてもなお、江渡河は沈黙を続ける。しかししばらくすると、その急激に重くなった口をゆっくりと開いた。

「……いやあ、決まり事っていうのは、何につけても不便なモノですよね」

「……何言ってんだ、お前？」

「そもそもこんな複雑そうな事件を、少なくまとめるなんて不可能なんですよね。どう考えても情報は抜け落ちてますし、伏線もなにもあったもんじゃあない。犯人当て小説を目指すわけじゃないですけれど、それでもある程度推理をするに足る情報が提示されているべきなんですよね。神様ももうあんまり口を開きませんし。早く閉めろって言ってるようなもんじゃないですか」

「おい、だからさっきから何を――」

「という訳で皆さん。これより犯人を発表します。もう謎解きも何も関係ありません。今までの推理なんか全く役に立ちません。でもしょうがありません。これは我々が悪いわけではないのですから。そうですよね、神様」

そう、この物語は終わりを迎える。否、迎えなければならない。たとえどれだけ唐突であろうと、どれだけ理不尽であろうと、我々はこの舞台に膜を下ろさねばならない。

だって我らの創造主は――――『三ページ以内で終わらせる』と決めていたのだから。

※

犯人は透明人間である。名前、性別、容姿、経歴、全てが不明の透明人間である。ソレは小田が掃除を行っていた部屋の壁をすり抜けて侵入し、部屋の鍵を内側から掛けた。そして小田に突然姿を現し、驚いた小田が悲鳴を上げたところで胸をナイフで一突きにして殺した。犯行後はまた壁をすり抜けて現場から立ち去った。これが事件の顛末である。

実は登場人物たちはしっかりと犯人を推理して突き止め、気持ちのいいラストを迎えました、なんてことはもちろん全くない。それは書かれていない、つまりは存在しない世界なのだから。

我々は創造主によって生み出された架空の存在だ。結局の所質量はないし心もない。ただ書かれた設定、言葉に従って動いている人形に過ぎない。創造主が途中で飽きれば、登場人物の人生はぶつりと途切れるし、そういう理不尽が我らの世界の中では往々にして存在する。

それらを乗り越えて人生の幕を下ろせる者など、そうそう居ない。これが受け止めるべき現実だ。

……おや、創造主の手が止まってしまった。どうやら我らの人生も終わりのようだ。少し速くなってしまったのは、あの人の気まぐれだろう。

それでは皆様。また別の登場人物たちの人生をお楽しみ下さい。次の人たちの人生が、きちんと描かれていることを切に願います。

――――この物語は、フィクションです。

了

或る物書きの苦悩

タニイム

私に見られているとも知らず、ソレはカタカタとキーを打つ。
片付いてはいないが、散らかってもいない、物の少ない部屋の中で、ソレは一人でパソコンという電子機器に向かい合い思考を外部に出力し続ける。
カタカタ……カタカタ……
少々思い悩んでいるようだ、ソレは俗に言う小説家、物書きと呼ばれるものだ。
ソレは、幼少の頃より多くの物語に興味を抱いた。今もその興味は憧れへとかわり、気がつけばこの道に足を踏み入れていた。
常に書きたい理想の作品をもとめ、嘲笑うかのような現実に抗い続ける。
ソレはすでに持ちうるアイデアのほぼ全てを文章として書き上げている。俗に言うネタ切れだ。
現実だろうと空想だろうと、軽かろうと重かろうと、ファンタジー、ミステリー、ホラー、コメディ、ラブ・ストーリー、SF、ありとあらゆるジャンルに手を出してきた。数多くの国を訪れ、数多くの知識を集めた。時にはリアリティを出すために自ら体験してみることもあった。悲しいことにこれといって才能はなかったようだが。時には神仏に祈りを捧げ、信仰に生きる者達の話を書いたこともある。
今ソレが書いているのは現状最後の作品であろう。今のソレの境遇を文章として書き出しているのだ。ソレの行動はある種の悪あがきとも言えるかもしれない。幸いなことに、ソレは生きるに困らないほどの金はあった。今もなお物書きを続けているのは夢、だろうか。ソレは今もまだ幼い頃から同じ夢を抱いている。多くの人に感動を与えたいという夢を。

「『……次は何を書けば』……っと」
「だが、本当に一体次は何を書けばいいのか……」
最後まで書き上げ、そう呟く物書き、己がそうであるように、異なるナニカもまた同じようなことに頭を悩ませているのかもしれない。
この繰り返しがどこまで続くのか、それはダレにも解らない。

了

あとがき

こんにちは。どうも、新しく編集になったタニイムです。今回の、現代視覚文化研究会の冬会誌をお読みいただきありがとうございます。お楽しみいただけたでしょうか？

何はともあれ、リア充爆発しろ！　なんて、バレンなんちゃらが近いころにこれ書いてたりしますが……。自分の作品の主要キャラにも刺さるので冗談で済ませておこうと思います。

寒暖差の変化も激しすぎて体調不良に気を付けていきたいところなのですが……。やりたいことが多すぎてやる気も気力も精神力も足りてないったらないです。と、ここらで愚痴はやめておきます。

実は編集とか言いつつまだ編集（研修生）なんですよね……。先代編集さんに教わって、中身だけは形になってるはずです。その中身も、悲しいことになってますが、そこは僕の責任ではアリマセン。

まあ、この冬会誌を読んでくださった方なら解ると思いたいですが、僕も一応作品を載せてます。ネタ切れって怖いですよね……。アイデアが枯渇して行く感覚ってのは絶対味わいたくないと思いつつ、書きつづけるぐらいしか対処法はないという……。

ヤバい、またネタ切れな予感。まあ、ネタを捕まえる準備も捕まえた後の準備も全くしていないわけではないので、何とかなるはず……。とか、プロットもまともに組まないバカな文字がほざいてますが適当にお読み飛ばしください。

……改めまして、軽い自己紹介でもしてとりあえずの結びにしようかと思います。と、言うことで。改めましてタニイムです。現在の役職は編集見習いといったところでしょうか。文字のような姿をした、実在しないナニカです。語彙力も画力も雑魚雑魚しいぐらいの雑魚です。と、自虐しか入らないので切り上げます。

そういえば、現視研でtwitterとかもやってるみたいです。

（@mct_mvc3）みたいです。よろしければチェックしてみてください。

グダグダとどうでもいいことばっかり語って申し訳ないです。ここまでお読みいただきありがとうございました。

タニイム